

古典の日推進委員会発足15周年
古典の日フォーラム2024

日時: 2024年11月1日(金)午後1時~3時45分

場所: 宇治市文化センター大ホール(宇治市折居台1丁目1番地)

内容: 総合司会 三宅民夫さん(元NHKアナウンサー)

〔第1部〕

◆テーマ曲「古典の日燦讚」と「古典の日宣言」

演奏: 大谷祥子と六条山楽坊

宣言: 谷崎勸九郎

第13回古典の日朗読コンテスト[中学・高校生部門]大賞受賞者

◆主催者挨拶

古典の日推進委員会会長 村田純一

文化庁長次長 森田正信

◆来賓祝辞

元衆議院議長 伊吹文明

◆第39回国民文化祭『清流の国ぎふ』文化祭2024』との連携

メッセージ: 古田肇(岐阜県知事)

岩村町獅子舞(岐阜県重要無形民俗文化財)



岩村町獅子舞とは？

江戸時代末にはすでに行われていたとされる民俗芸能で、岩村城下町の農村部の「入り四郷」と呼ばれる4つの集落の人々によって保存伝承されてきた。大神楽系の獅子舞で、雌獅子頭をかぶった男性が女装して舞う優雅なもので、男性が女性らしいしぐさをいかに表現するかが見せ場。重要伝統的建造物群保存地区に選定されている旧岩村城下で上演されており、独特な芸能空間を味わうことができる。

[第2部]「紫式部の世界」

◆講演「源氏物語の魅力」 高木和子(東京大学大学院人文社会系研究科教授)



『源氏物語』は、研究者の中で大体3部構成と考えられる中、高木先生の推しは、第2の物語。一番重厚で面白く且つ心に迫る。ここがなければ千年伝わらなかったのではないか。この物語の中で繰り広げられる光源氏の恋愛遍歴はご存じのとおり、若い頃からのたくさんの女性との関わりです。このおかげで光源氏のことが嫌い！という女性はいっぱいおられることでしょう。登場する女性は2タイプに分けられ、1つは、光源氏の栄華の達成に貢献する女性。一方は光源氏に庇護される女性です。社会的、政治的に発展させていく女性たちばかりでは光源氏はすごく嫌な奴で終わってしまうでしょう。ではどうしてみんなに嫌われない立派なヒーローになったのでしょうか。それは、何の役にも立たない女性をすげなくしない、見捨てない慈悲心を光源氏は持っていたからです。それにしてもこの物語に倫理観はあるのでしょうか。あるんです。一つは光源氏の出家願望。罪に対する償いの思いを持っていたんですね。2つ目は遺言を守る。出家しようとする後見を託されてしまう。なので出家できない。欲があって、失敗して人間らしい姿が描き出されるからこそ物語になる。繰り返し同じシチュエーションを別の人間にやり直させるのが、物語が長編化する原動力となります。栄華を極めつつ、思い悩み、わびしい時間を過ごす光源氏のことを物語は突き放さず、決して悪い男だと語ろうとしない。光輝く人として物語から退場してから、宇治十帖では男の物語から女の自立の物語へと進んでいきます。

◆パネルディスカッション「紫式部の魅力」

臈谷壽(同志社女子大学名誉教授)

高木和子

家塚智子(宇治市源氏物語ミュージアム館長)

コーディネーター 三宅民夫



第2部までに書ききれなかった女性の内面を発掘することに力点をおいて書いているのが宇治十帖。書き手が女性だからこそ、物語は女の自立に目覚めていきます。この作者紫式部はどんな人物であったか？観察眼が鋭く、他者の内面を凝視して、自分の内面と往還するような内向的な人物。明るいと思われ清少納言とは対局的と高木先生は分析。臈谷先生は「杉本苑子さんは清少納言は感性の人、紫式部は理知の人、和泉式部は情の人。寂聴さんは清少納言はウィットに富み、紫式部は妄想の天才。梅原先生は和泉式部、赤染は超美人、清少納言は美人じゃない。紫式部はそれ以上と評価」あんな長編を書く人は美人であるはずがない！と面白い例を挙げてくれました。女は大事な人を亡くした時に心の癒しとして回想録の日記を書くのを紫式部はフィクションの物語として、普通の人にはやれないことをやっちゃった。物語は第一部で終わるのが典型。そこで終わっていたら多分千年残っていなかった。さて、紫式部の魅力は？「紫式部集」という歌集。「紫式部日記」という日記。「源氏物語」というフィクション。作者がわかっているものを3つ残していること。紫式部は多面的に人を見ている。老いも若きも恋に悩んでいる人、お金のない人。読むとどこか自分の胸に刺さってくる。いろんな世代、どんな立場の人も共感できるのが、優れた古典の条件。それを備えているのが「源氏物語」でありそれを書いた紫式部の魅力であると締めくくられました。